

| | |
|----------|--|
| 氏名 | 栗川 直子 |
| 学位 | 博士 |
| 専門分野の名称 | 文学 |
| 学位授与番号 | 博甲第 5185 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 27 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部科学省令)第 4 条第 1 項該当) |
| 学位論文題目 | 絵画の形状が印象に及ぼす影響 |
| 学位論文審査委員 | 主査・教授 長谷川 芳典 教授 田中 共子 准教授 堀内 孝 准教授 龍野 有子 |

学位論文内容の要旨

絵画の形状(絵画自体の輪郭、額縁の形状、背景等)が観察者の絵画に対する印象にどのような影響を及ぼすのかを心理学的手法に基づいて分析した。論文は5つの章、7つの実験から構成されている。

第1章(序論)では、絵画に対する美的反応に影響を及ぼす諸要因を検討した心理学の先行研究について論じられている。これまでに接してきた刺激と比較して新奇性や複雑性が適度に高い場合に快感情が高まるという説がある一方、明るい色使いで対象を写実的に描いた典型性の高い絵画がわかりやすさや楽しさをもたらす快感情を高めるといった説もあり、いずれにおいても、先行する経験やそれに基づく予期が絵画に対する美的反応に影響を及ぼすことが指摘されている。

第2章と第3章では、絵画の輪郭・額縁の形状をさまざまに変化させたときの印象の変化が分析された。実験の結果、輪郭・額縁の生成特徴とSD法によって測定された印象の間に対応関係が見られ、規則性・対称性は調和性あるいは評価性と、不規則性・複雑性は活動性と、曲線性は柔和性と、それぞれ対応することが明らかとなった。これらの対応関係は、実験に用いたすべての絵画に共通して見られたが、期待値と実測値の比較から、輪郭・額縁によってもたらされる印象は絵画全体の印象に加算的に影響を及ぼすわけではなく、形状と絵画の種類によって印象の増大・減少の割合に違いが見られることが示された。さらに、額縁と絵画の間の距離、つまり余白(マット)の大きさが印象に及ぼす影響について検討したところ、余白の大きさが変化することによって評価性印象が変化し、絵画の種類や額縁の形状により余白の効果に違いがあることが明らかとなった。

第4章では、絵画と額縁の組み合わせ効果に及ぼす理解度の影響について検討された。写実的に描かれた絵画は理解度が高く、描かれた個々の事物は具象的であっても不自然な要素を含んでいたり作品全体の場面構成が不明瞭であったりする絵画は理解度が低かった。これらの絵画に額縁を組み合わせると、規則的・対称的な形状の額縁の場合、絵画に対する理解の程度にかかわらず一定の調和感が得られるが、不規則・複雑な形状の額縁の場合は絵画の理解度が低い時には中程度の調和感が得られるものの、理解度が高くなるにつれて調和度が低下することが分かった。また、2つの印象評価因子のうち評価性についても、調和度と同様に不規則で複雑な形状の額縁を組み合わせた際の低下がみられた。

第5章は総合考察である。まず、実験的検討全体を通じて、輪郭・額縁の形状によって絵画の全体的印象は変化するがその変化の程度は絵画の理解度によって異なることが明らかとなった。本研究では典型性の高い絵画には不規則・複雑な形状の額縁の影響が強く現れ、典型性が低い場合には影響があまりみられなかったという結果が得られたが、これらは先行研究において、芸術に関する知識を持たない非専門家は抽象絵画より写實的絵画を好むこと、また、絵画以外を対象とした研究において、親和性や典型性の高い対象に対する予期の逸脱が不快感をもたらすと指摘されている点と一致するものと考えられる。絵画の形状から得られる印象には絵画の種類にかかわらず一定の対応関係がみられたが、表現内容と形を組み合わせただけの場合には、個人の経験や期待が美的反応に影響を及ぼすことが示唆された。絵画を見るという行為は、認知的経験と感情的経験の相互作用によって成り立つものであるといえる。

学位論文審査結果の要旨

まず、主査より予備審査段階で改善を要すると指摘された点が再確認された。続いて申請者より、加筆修正の箇所や、新たに追加された実験研究について説明がなされた。また全体を通じて専門用語の精緻化がなされたことが確認された。

次に、各委員から、論文の内容について質疑が行われた。全体的にみて、本論文は、研究テーマの内容および研究方法という点で心理学の先行研究には無い独自の着眼点があること、研究内容の大部分がすでに国際学会を含む全国学会9件で発表され、さらに4篇の査読付き論文（うち1篇は学会誌）として刊行されていることなどから、学位請求論文としての水準に達しているとの評価がなされた。

いっぽう、オリジナルの絵画を尊重する必要性、絵画を実験刺激に用いることの独自の意義をもう少し強調してほしい点、人物が含まれている絵画とそうでない絵画との違いについてさらに詳細な分析が必要である、などが指摘された。

実際の絵画作品を刺激材料に用いることは、それぞれの作品の固有の特性を反映し普遍的な効果を検証しにくくするという問題がある反面、単純化しすぎた図形刺激では検出できないような相乗効果を確認できるというメリットもある。今回の研究は、少なくとも反例提示型のロジックとして成果を挙げているのではないかと評価された。

審査を通じて、本論文において知覚心理学を土台とした心理学の研究方法が十分に駆使されている点、また申請者が課題の意義や限界、今後の展望をしっかりと語る能力を備えている点が確認され、審査委員は全員一致で、本論文を合格と判断した。